

心電図検査を基本から学び直す —検査の始まりから判読まで—

齋藤 和

札幌医科大学附属病院 検査部

正確な心電図検査を行うためには、患者さんの案内・誘導から始まり、スムーズなベッドへの移乗、正確な電極の装着、波形の的確な読み取り、そして検査後の安全な退出に至るまで、すべての工程が非常に重要です。それぞれの工程には意味があり、どれか一つでも手を抜いてしまうと、検査結果の信頼性や診断精度に影響を及ぼす可能性があります。そのため、検査に携わる技師は、一つひとつの工程を丁寧かつ的確に行うことが求められます。

また、検査を開始する前に、医師からの指示や依頼内容、そして検査の目的を正確に把握しておくことも極めて重要です。患者さんの症状や既往歴、検査に至る背景を把握しておくことで、波形のどこに注目すべきかがはっきりし、より適切な判読や対応につながります。事前の準備と情報収集が、検査の質を左右すると言っても過言ではありません。

心電図検査は、単に電極を取り付けて波形を記録するだけの検査ではありません。正しい装着位置や基本的な波形の“知識”、臨床的に重要な異常所見の見落としを防ぐ“観察力”、さらには不整脈や急性心筋梗塞に関連する波形変化など、緊急性の高い所見に迅速に対応する“判断力”も求められます。これらは、日々の経験の中で継続的に学び、身につけていくべき大事な“力”だと思われます。

今回の講演では、心電図検査に携わる臨床検査技師として習得しておきたい「心電図検査の基本」を整理し、実際の症例や現場での経験を交えながら、日常業務にすぐに活かせる実践的な知識と“力”について、わかりやすく解説したいと思います。